圓光大師傳

廿九世

法然上人行狀畫圖第二十九

比叡山西塔の南谷に鐘下房に少輔とく聰
敎乃住侶あり。弟子に兒ありをくきて。
眼前の無常に驚き。交衆をのこくれたりえけ
き。八。三十六。に年遁世して。上人乃弟子こ成。
成覺房幸西と号しをくり。淨土に法門を本
たづねる天台宗より引入をく。遊門に弥陀本門の
弥陀といぬこを成たてを。十劫正覺といへるは。

九曜文庫

迹門の弥陀と本門乃弥陀ハ。無始本覚ハ如来
のゆへよ。我ホ所具ハ仏性とぞ。差異
なしこれ謂をきく一念よりたわぬ多念乃
数遍。なる無益なりと云ふ。一念義と云
事ハ自立しなるを。上人此義善導和尚ハ
御心よりむなわぬ。なる。ハ。なるへ。ハ。
より。割しなる。ハ。なる。ハ。義引ぶしてなを
此義を興しなれ。ぞ。乃弟子よあぶこと。

擯出せられよなり

兵部卿三位基親卿ぬく上人勸進の旨を
信じて毎日五萬遍ずゝ數遍をつとめたまふを
ゆるして成覺房一念義をたてゝ彼卿ず數
遍を難しなを重ねて問答して成覺房ず
義なりひよ所存をまうして上人ず尋申され
ける狀云念佛の數遍なりひよ本願を信する
樣基親の愚案くずくに難者いかれ
なく覺俤此折紙ず御存知の旨御自筆にもて

書給ふべく俤難者に答ふべきにもあ
ゆへなし別解別行ず人ずて俤ず專ずを
入るゝ法俤ず御弟子等ず說ず俤へず不
審を申俤ずなり又念佛者ハ女犯なくゝ俤へ
ゝ法と申あひだ在家ハ勿論なり出家ハこゝ
本願を信ずして出家ず人乃女をもちたる
俤條ゝ孔なく俤數善導ハ目ず見あけて女人
をふれゝ法とゝて俤め孔この事あるく

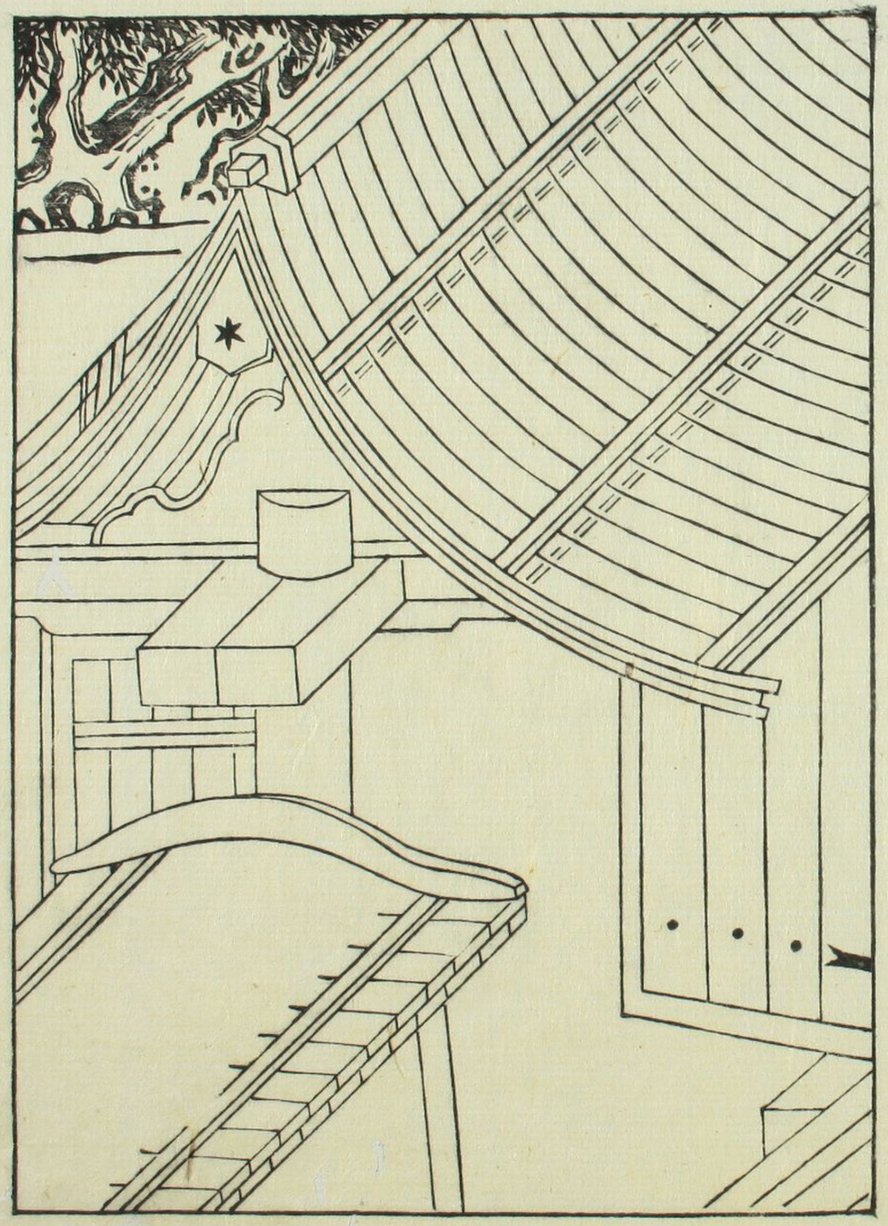
仏をうるべく侍。基親ハ。たゞひとへに本願を
信じて。念佛を申侍ばかり。料簡を才学も侍ハ
ぬゆへなり。云云 取註彼註進状云

基親取信本願之様

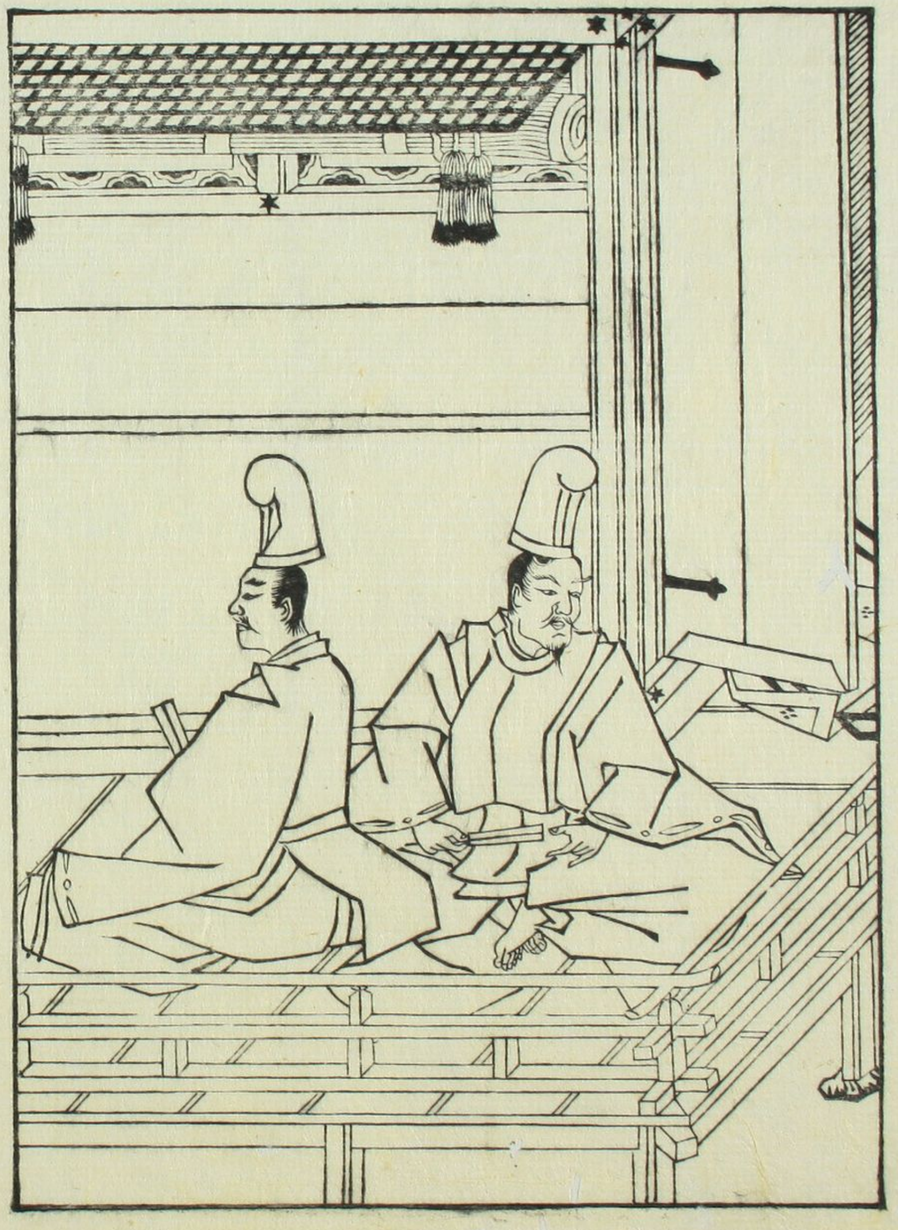
雙巻経上云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。
欲生我國乃至十念。若不生者。不取正覚。文
同下云。聞其名号。信心歓喜。乃至一念。至心廻
向。願生彼國。即得往生。住不退轉。文 往生礼
讃云。今信知弥陀本弘誓願及稱名号。下至十
聲一聲等。定得往生。乃至一念。無有疑心。文
観経疏云。一者定深信。自身現是罪悪生
死凡夫。曠劫已来。常没常流轉。無有出離之縁
二者定深信。彼阿弥陀佛。四十八願攝受衆
生。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。文 此等ハ
文を案じ侍て。基親罪悪生死凡夫たりと
いへども。一向に本願を信じて。名号を唱へ侍。

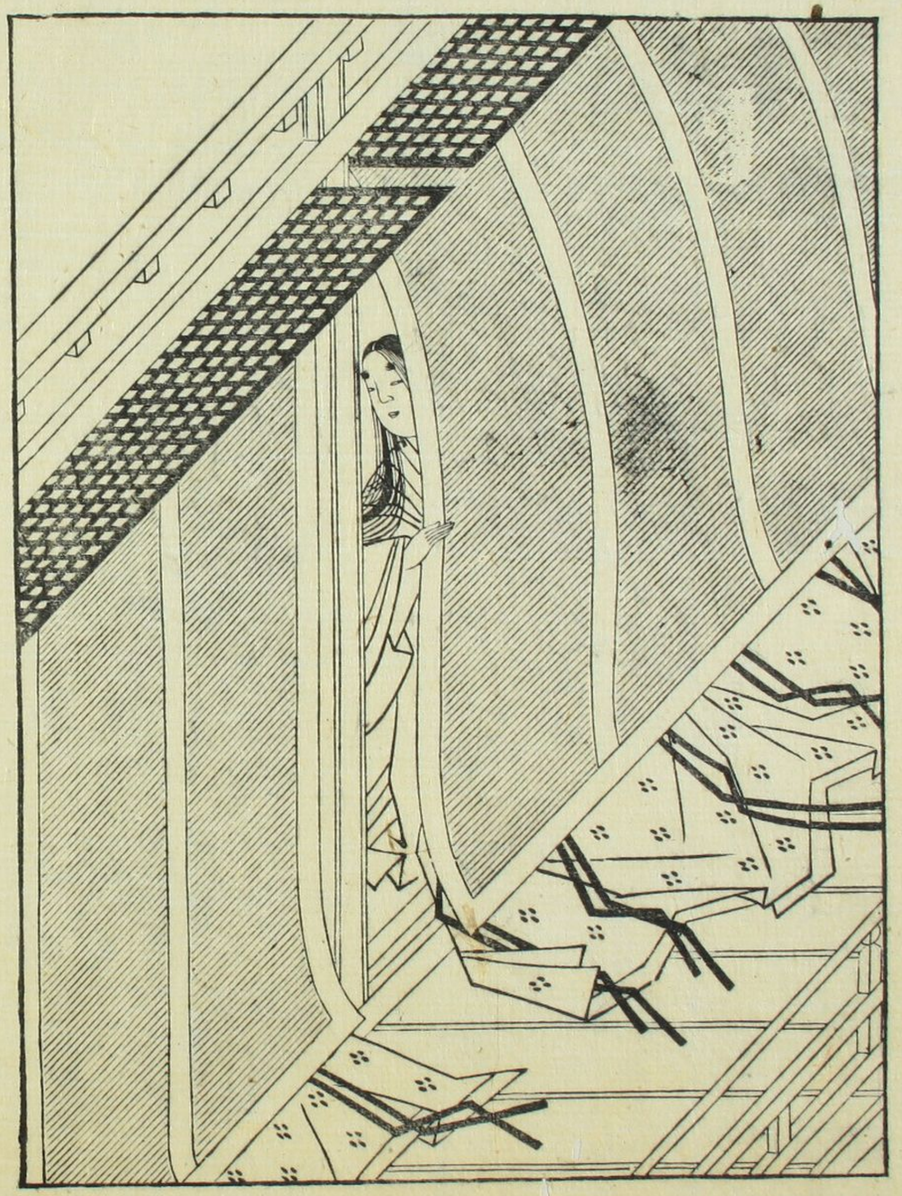
毎日に五萬遍なり。変定佛は本願に乗じて。
上品より往生をえさせ給ふ。存知仕れ候。
此外別の料簡なく仕る。或人本願を
信ずる人は一念なり。或人五萬遍無益なり
とは本願を信ぜざるなりと申。基親答曰念
佛一聲は外百遍乃至萬遍は本願を信ぜぬと
いはんや。難者云。自力にて往生はかなひ
がたし。たゞ信ぜんのちは念佛の數無益

なれども申。基親又申云。自力往生とは。他の雑
行等をもて願をもと申さんにては。自力とは
申仕はべる。隨て善導は疏云。上盡百年。下至
一日七日。一心專念弥陀名号。定得往生必無疑と
仕べるは。百年念佛すべしとこそ仕へ。又上人の
御房は七萬遍を唱へしべきまゝ。尚も基親御弟子
の一分たりとて數多く唱へんと存仕る。
佛の恩を報ずるなり。礼讃云。不相續念報彼



佛恩故心生輕慢雖作業行常與名利相應
故人我自覆不親近同行善知識故樂近雜
縁自障ニ他往生正行故云云佛恩を報ずる
念佛ハ數遍多く申べし と見えたり
申云云





上人御返事云。たはぶれのひとつ謹奉侍畢。御信仰こそ
しなん樣。折紙具てり拜見侍りぬ。一分を愚
意の所存よたがへ侍ぬく隨喜し奉侍
たり。近來一念ゝ外の數遍無益なりと申
義出來侍勿論不足言ゝ事に侍。文釋を離て
義を申人ゝ。ゝてゝ證を得侍歟。如何ゝ不審侍。
又ぬく本願を信するゝ破戒をゝわるゝ人
かゝるゝゝ事。ゝ我まゝこゝいせ殺ゝを不

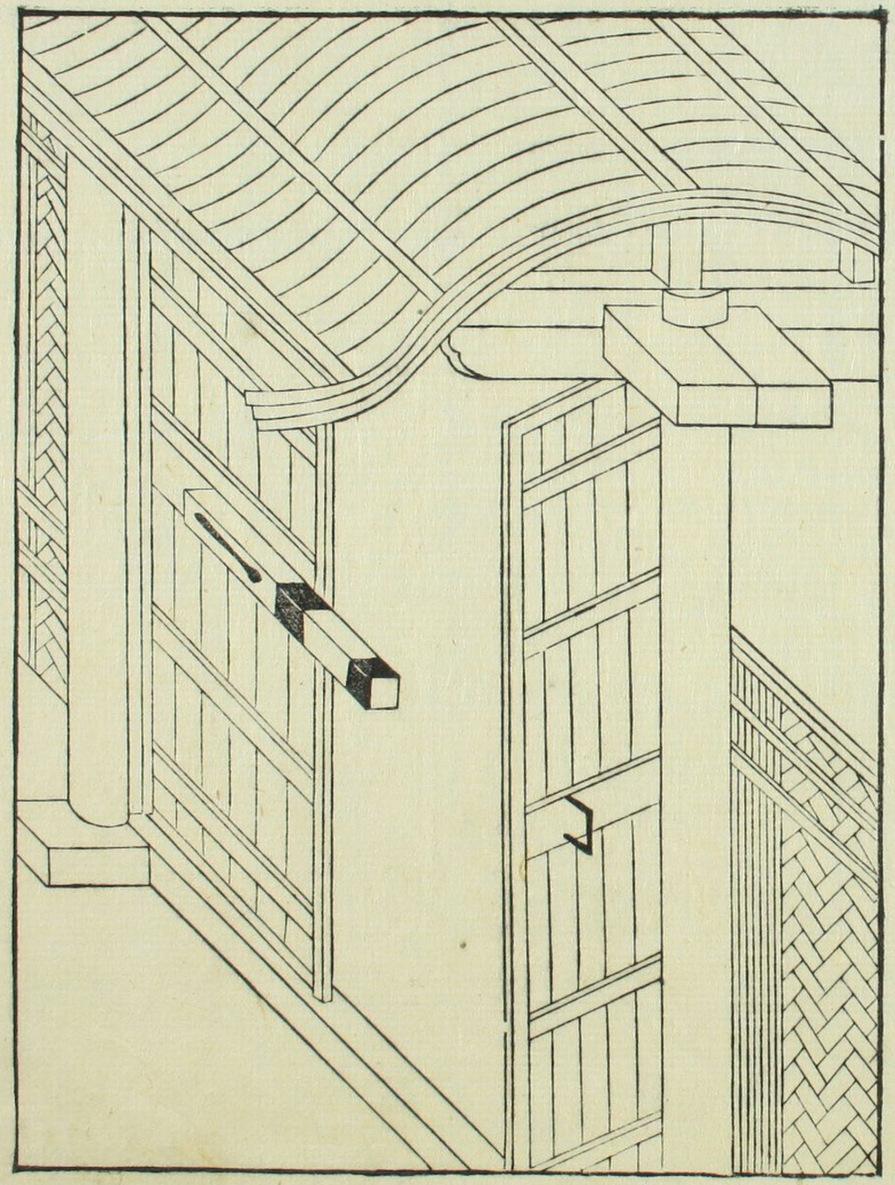
可及事歟附佛法の外道外り求るを法たハ
近来念佛乃天魔さそひ来てつくれるきの
狂言いてきり狂歟なをく左右よあ
八次狂 云云
取註

成覚房は弟子等。越後國にして。一念義を立
てるを。上人の弟子先明房といひしが。多念乃
行者なり。是を心えぬ事に思て。の此所述の
法門をもつて。上人にうつたへ申し社。是を
御返事云。一念往生は義。京中にを粗流布
する所なり。凡言語道斷の事なりまつて
ほつほつ御問答に不可及歟。所詮双巻経の
下に。乃至一念信心歓喜といひ。又善導和尚は。

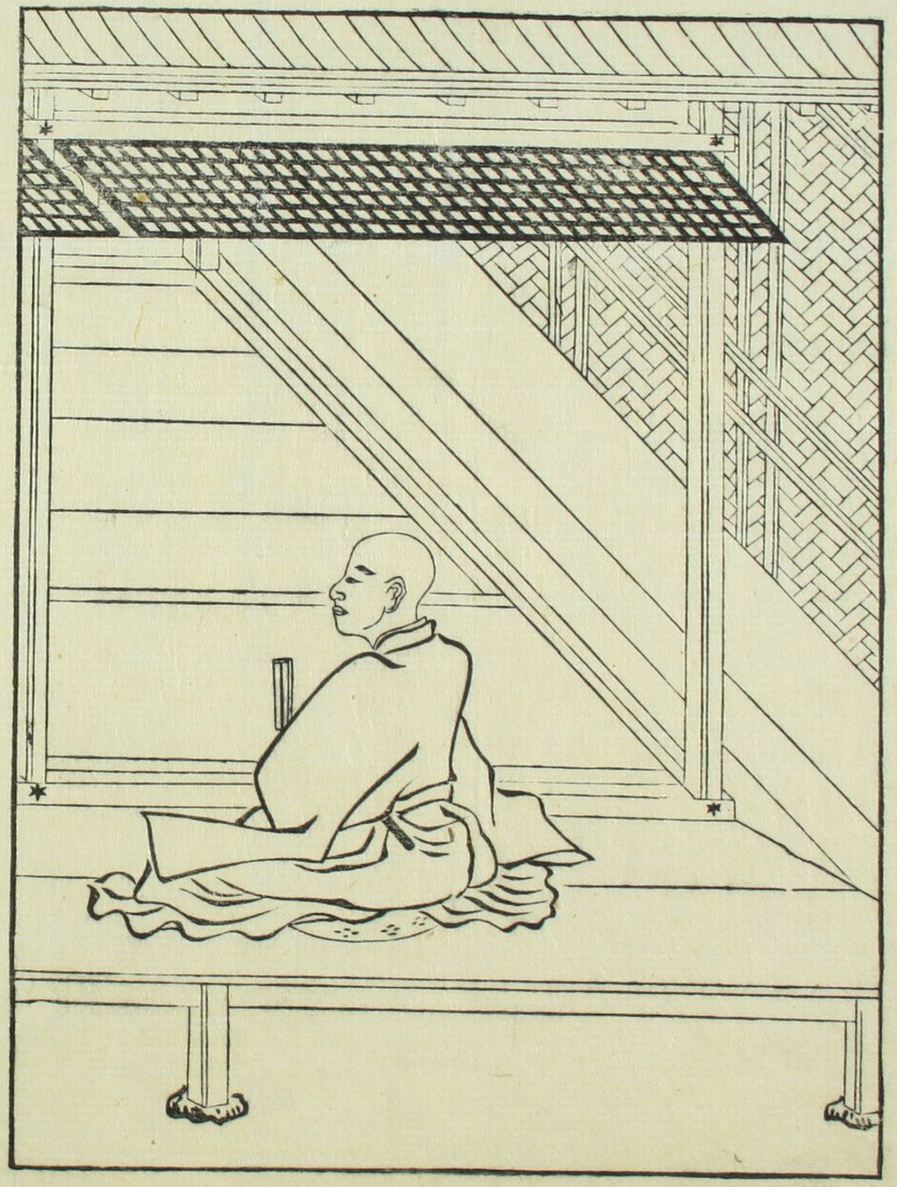
上盡一形。下至十聲一聲等。定得往生。乃
至一念。無有疑心。といへる。此等は文を。あ
料簡する輩。大邪見に住して申出所なり。乃
至といひ。下至といへる。これ上盡一形をかねたる
なり。さる。況近代愚癡無智は輩。多く
偏に十念一念なりと執して。上盡一形を
廢する條。無慚無愧は事は。實に十念一念
にをて。佛の大悲本願なを。必引接し給ふ

無上の功德なりと信じて一期不退に行す
るきなり。文證多しといへども。これを出すに
をよばず。ひとへに一切衆生の事なりとにて
邪見の人此難をうぬりて答ていはく。ひと
いぬ所も信成一念よりこのかた念佛申
さんとて又念佛申すとはいかなる佛
いつこれ又詞は尋常なるに似たりといへども。
心は邪見をもつて成ゆへに。決定乃

信心をもつて一念にてのちは又念佛せず
いぬるも十惡五逆なを障をなさず況
餘の小罪をやと信じべきなりと。此思よ
住せんものはひおほく念佛といぬるも。
阿彌陀佛の御心にかなはんやいかに經論。
人師乃說そやとひとへに懈怠無道心不
當不善の凡夫の惡機たらんと
思て申いるせる事なれば。凡かくのごとき乃



人ハ。附佛法の外道なり。師子身虫なり。
又うかつくい。天魔波旬のために精氣を
うばる輩也。そろくの往生乃人をば
まるぎんとする歟。たゞあやしむべし。ふく
れたるべきなり。毎事筆端よりく
かつ。謹言 已上
取詮



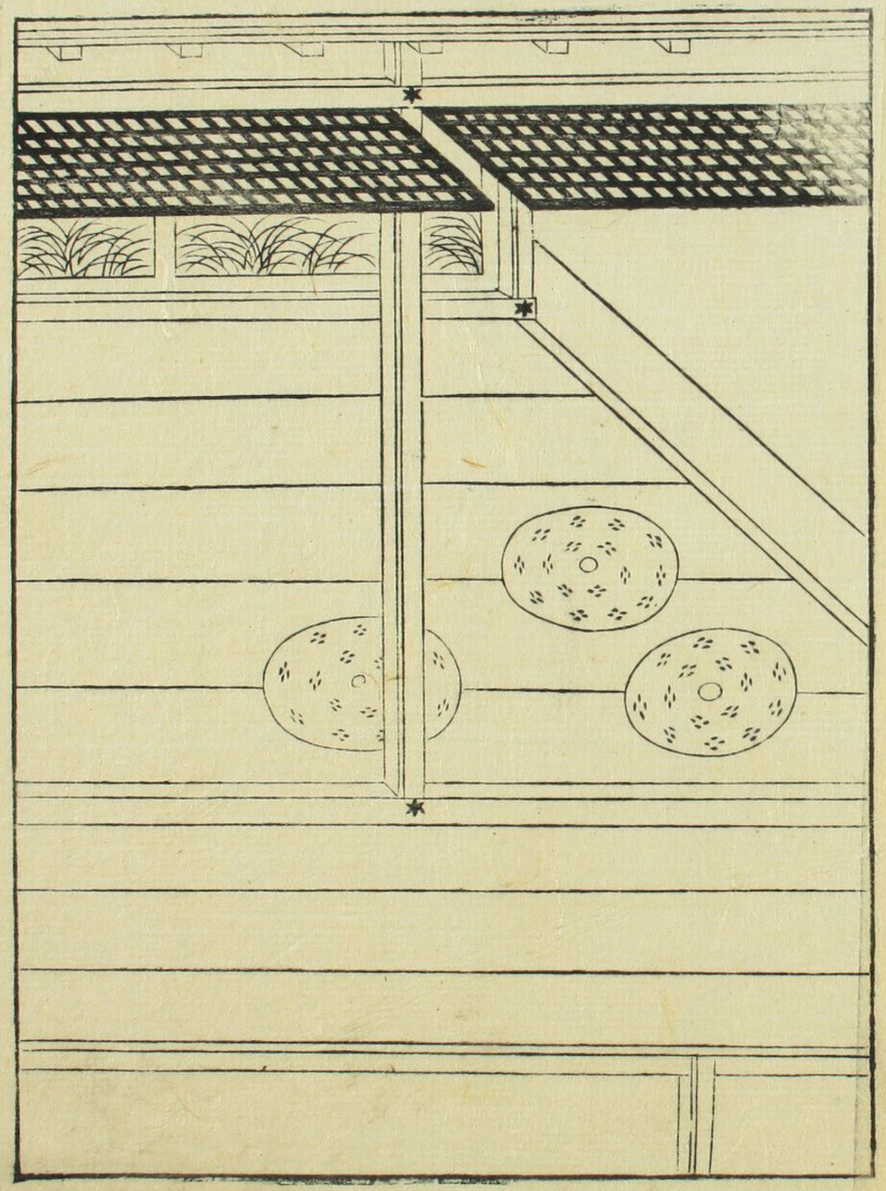
光明房の状によりまして。上人。一念義停止の起
請文を定めらるるの状云。當世念佛門よりたを
むく行人等の中に。多く無智誑惑の輩あり。
いまだ一宗の廢立をまつ。一法の名目に
をよいて心に道心なく。身に利養をもとむ。
ふまことをもわて。恣に妄語をもつて諸人を
迷亂せ。偏に渡世の計とす。くるまに
たく来生の罪をもつへわ見ぬ。ふ由をも

一念の偽法をひろめ。無行のとがを謝し。
あまねく無念の新義をたてて。なを一稱の
小行ばかりなを微善ばかりといへども善根に
をいてあとばけだに重罪なりといへども
罪障にをいていよいよ勢ばかりに刹那五欲の
樂をうけんがために永劫三途の業をそ
きぬ人を教示していくく。弥陀の願をもつて
むをれば。五逆をもつてこのるこころ。心にま

こうせて出家し戒を受け袈裟を着ときへるなり。
ようろうしく直垂をきるへし。婬肉を斷す
色かゝ淫慾より鹿島に食色し。云云弘法大師。
異生羶羊心を釋して云たゝ婬食をたゝ
こゝの羶羊心とは。云云これ葷たゝ欲より
ふかくして。偏にこの乃類數十住心は中の三悪
道の心はかりたまうこと是をあはまはたらんや。
たゝ餘教を妨のみにあらずして念佛の

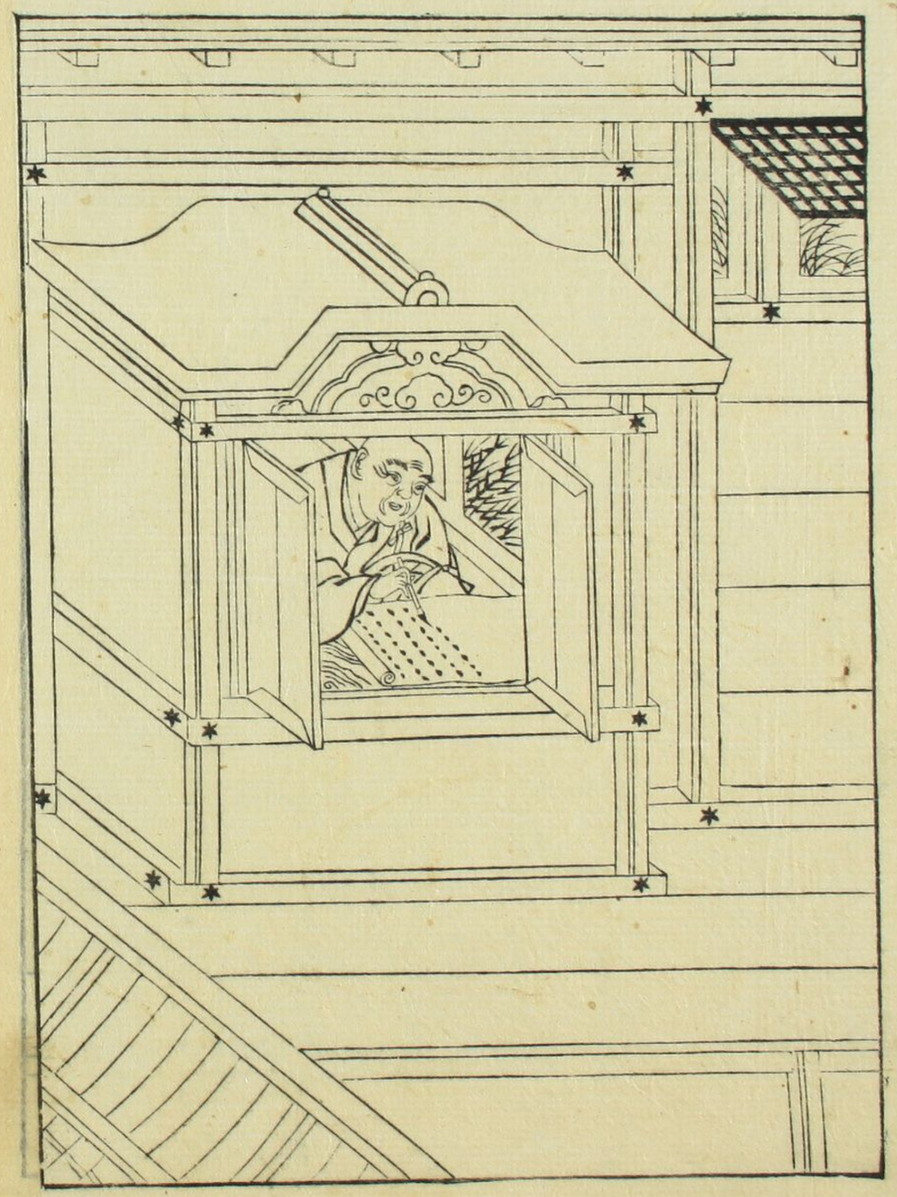
行を失ふ懈怠無慚は業なりとて捨戒
還俗の義を言あらそこの本朝は外道なり。
言れとても天魔はうまへなり佛法を破滅し。
世人を惑乱して妄語をかまへていとく。法然
上人の七萬遍の念佛は此こそ外は方便なり。
内は實義あり。人いまこと是を言は所謂心に
弥陀は願を言れは身の外は極樂に往生す。
浄土の業こそ滿足しぬこのゝへなんを一遍

なりといはゝ重て名号を唱へ給きやゝの
上人の禅房に参いて門人等二十人あまり
秘義を談ずる所に浅智の類ハ性鈍にして
いまゝ聞ども利根の輩まゝに五人此深
法を得ると雖その一人なりかの上人の思
中の奥義なり容易これをゆるすべからハ
ものをえらひて傳授すべし云々
説をゝ實なりゝ皆以虚言なり遠者ハ
ハきよんぐるめて今誓言をたゝ貪道り
これを秘ゝていゝかゝるのむなしをのべ
實れゝ後まるさハ十方の三寶まちに知見を
たゝ毎日七萬遍の念佛むなくそれ利益浅
うなゝ圓頓行者ハゝえんより實相を
縁とる六度万行を修して無生忍に至る。
いゝきれ法に行なゝく證をうるやゝ凡類ハ
この疑網に堕ちんぐひ邪見の稠林を切て。



正直の心地をこうき。將来は鉄城をのこすべく。
終焉乃金墓よりのがれんし。胡國程遠し。
思を鷹札より通ずと。北陸境遥なり。心を像教より
ひろめ。山川雲うさなりて。面洗千万里乃
月より面をあらはして。化導縁あり。膝を
一佛土の風よりぞ。ぜんず細端多し。毛筆より
あらはさるるを

兼元三年六月十九日沙門源宣云云　取詮



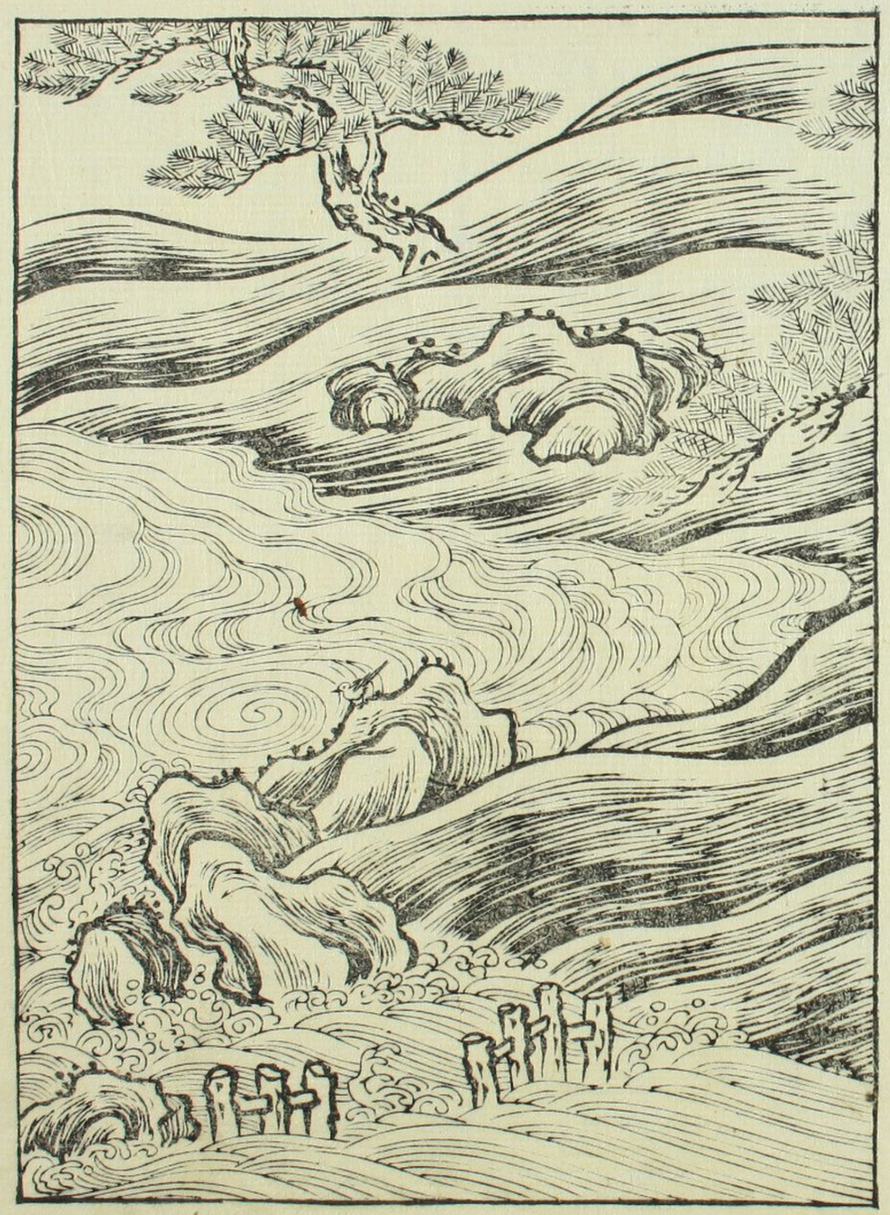
法然上人行狀畫圖第三十

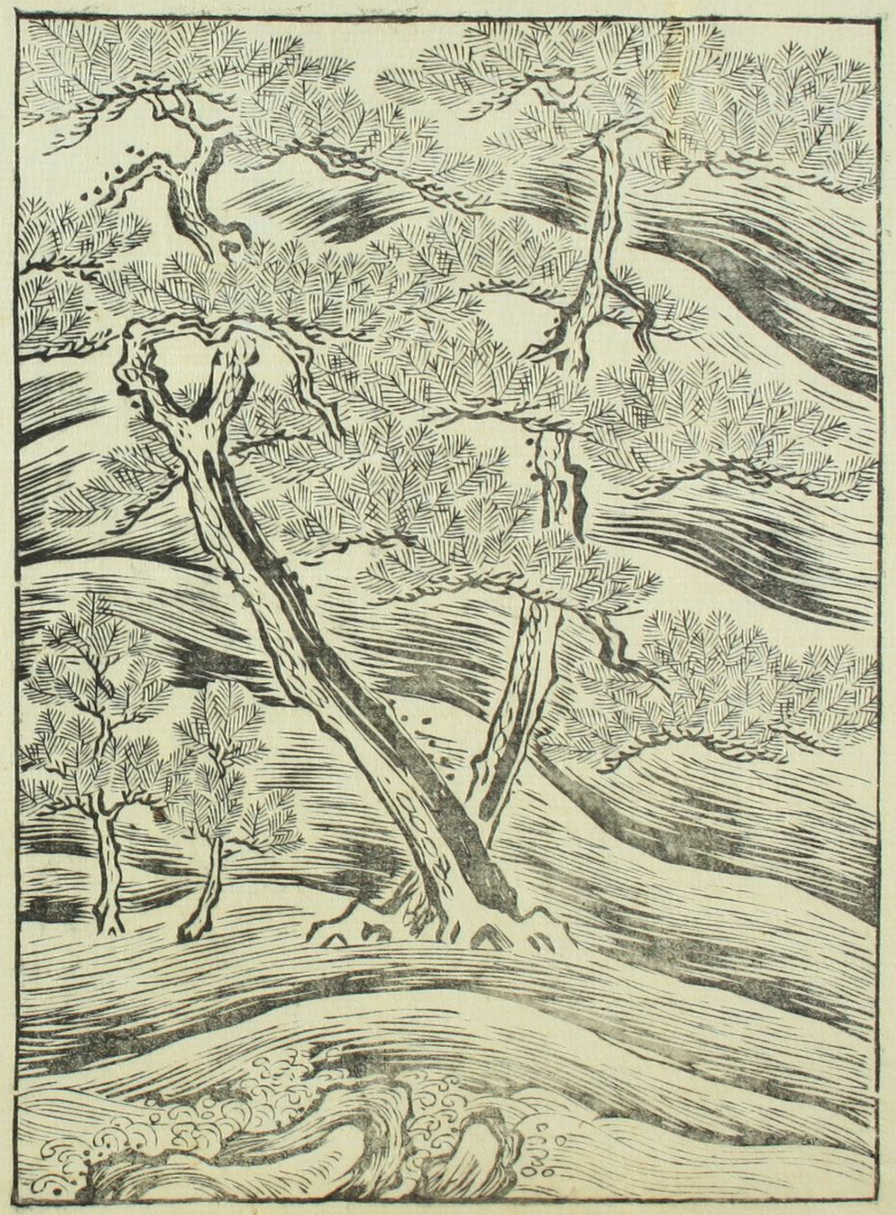
上人の師範。功德院乃肥後阿闍梨皇圓ハ。叡山
杉生法橋皇覺ハ弟子ニて。顯密の碩才なりき。
志ふかくこゝに思惟したゝく自身ハ機分淺
ゝ爲にこのひろやすく生死をおへゝ法
をたゝびく生をあゝたゝ隨生即忘
して。定て佛法をまもるへし。今たまく
人身をうくといへとも。恨らくハ二佛ハ中間ハ

してだを生死より輪廻せんこと疑ひなく長
命の報を得て慈尊の出世をあふんより命な
がきを蛇りすきたるハなり。我こゝ水の
大蛇の身をうくへし。但大海ハ金翅鳥の思あり。
池よりすまんと思ひて。遠江國笠原庄りハ
多の池と云池あり。それ所の領家より申
うけて放文をうつわ。命終のとき。水波ひ掌に
中に入てをうしなふ。其後雨ふり風ふ

ふるに彼池よりうに水まちち大波立て。池
中に塵をくゞ悉をそひあぐ。諸人耳目を
驚とよ。彼所より領家に参り申たる
をそれそれ日時を勘へらるに。彼閻梨命終の
日時よりそあらぬ風。當時より至るまて参川の
なる夜ハ池より振鈴の音きこゆたとそ申たへ
侍る未代よハかゝ風ため。あわかくや侍らん。
上人の弟子なるハ。智恵ありて生死のおろき

こゝに法然ハ道心あつて慈尊にあゝ事を
願ふといへども今ハ昔の畜趣に生を感せる
こと恥ゝたゝ浄土の法門をきゝざるゆへ
なり源宣そのこと此法をたつとんたゝまし
うハ信不信をうへわこゝ[illegible]夢中の事。極
樂に往生の後八十方の國土に住て經行し。
一切の諸佛恩に隨て供養を何ぞ必しも
ひさゝ[illegible]を穢土に處するこゝ法然ゆゝんや彼闍
梨くるゝて後佛に出世を期ゝてゝ[illegible]
池にすゝ[illegible]ゝんことゝ[illegible]
[illegible]

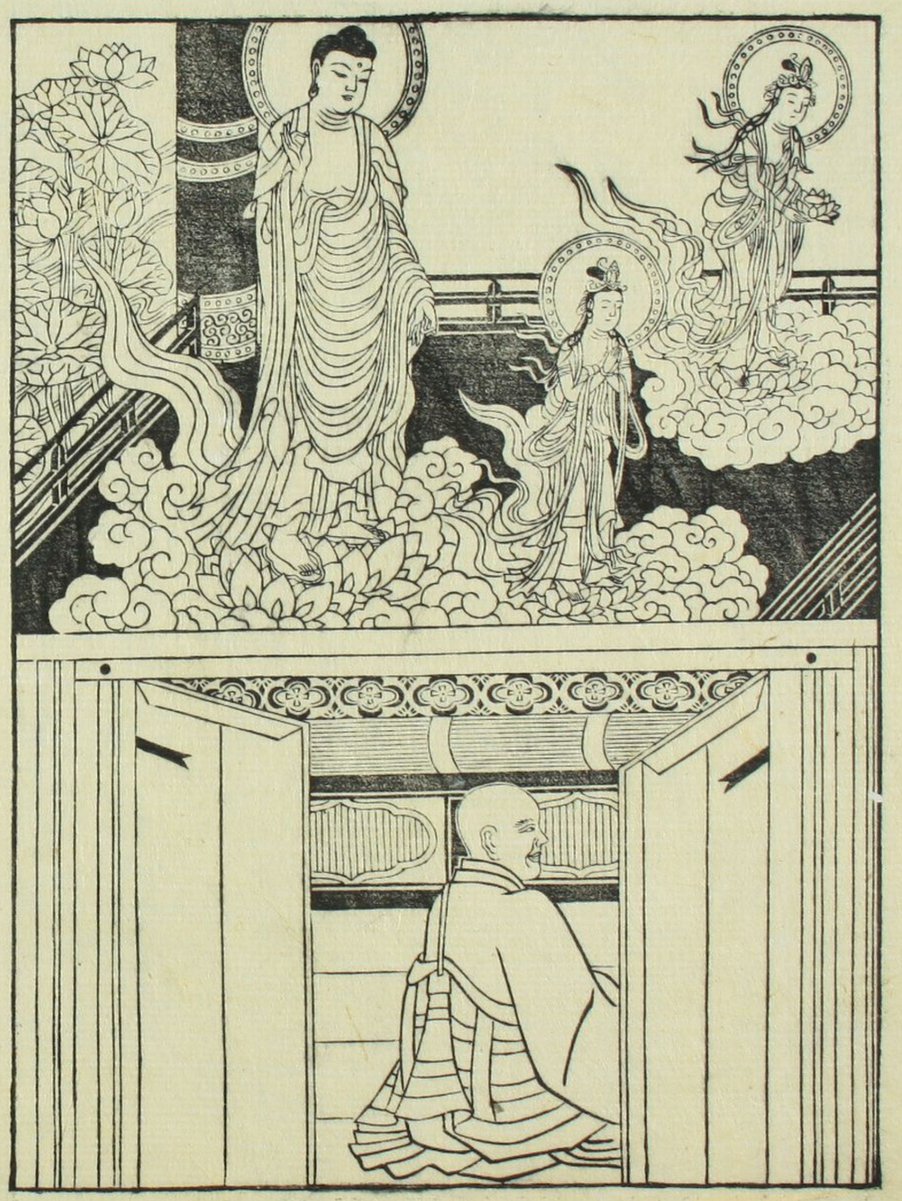




妙覚寺に浄心房らてさうきひだりあわれ。
道心ゆうきよりにて寺門を出ぶ念佛を行
すりあらう常れ人よこえたり。歸依する人
雲霞れてう。五十くりにて他界しうた。
臨終散こなりうまぷ人こうれをあやしうて。
妙覚寺の上人へうたにを往生せ況や餘人
をやと申あひうるな上人聞給ていさまう況。
虚假乃行者よりやありうんこ行うれたり。

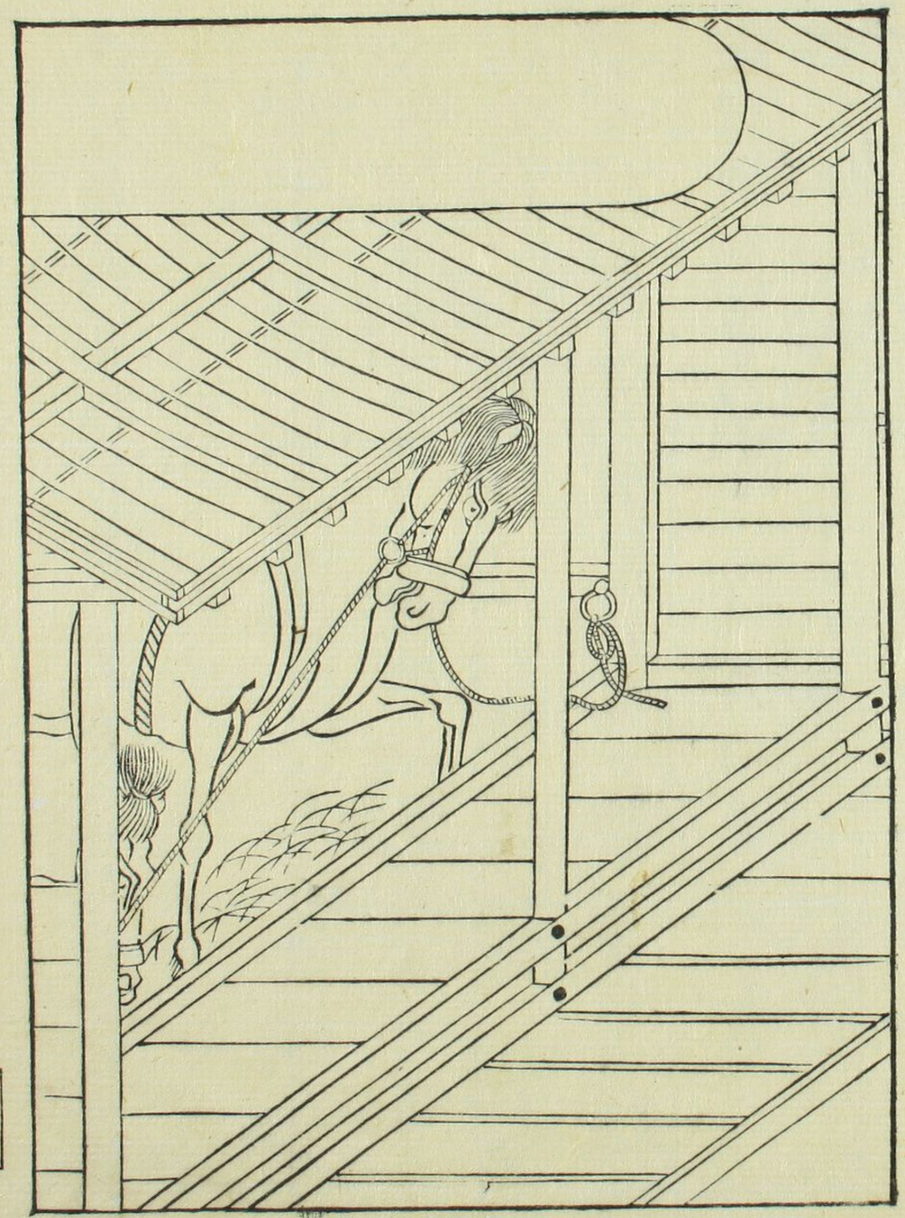
其後四十九日に佛事に上人を請じ奉て
ゆつりて唱導とす。日来に所化どもあつまりて。
種〻の捧物をちらけ置るなりに常随に弟子
衣箱を取出て。これ先師年来に所持物なり。
こゝにらて御布施に奉れり。件の箱には
布の衣袴乃尋常なること。布に七條の袈裟。
なゝひに十二門乃戒儀をふくれさせんとり
なり。上人仰〻に申るは。日来源宣の申たる

こゝたうにいたりなるとこれひとり極てしき
虚假の人なりき。此所持物をこゝに德たて
人にたうゞれて。戒師になんとれなふ心なく
をこれひなるれをとの強なれて人をれ不
審ひゝきなり



治承四年十二月廿八日。本三位中將重衡卿。
父平相國の命によりて。南都をせめしとき。
東大寺に火をはなつ。しかるに大伽藍忽ちに灰
燼と成しき。其後元暦元年二月七日。一谷の
合戰に。彼中將いけどられて。都へのぼりぬ。
大路をわたしまいらせしあわれき。後生
菩提の事。彼中あハせんがためにその請あり
ければ。上人おりて對面し給て。戒をさづけ

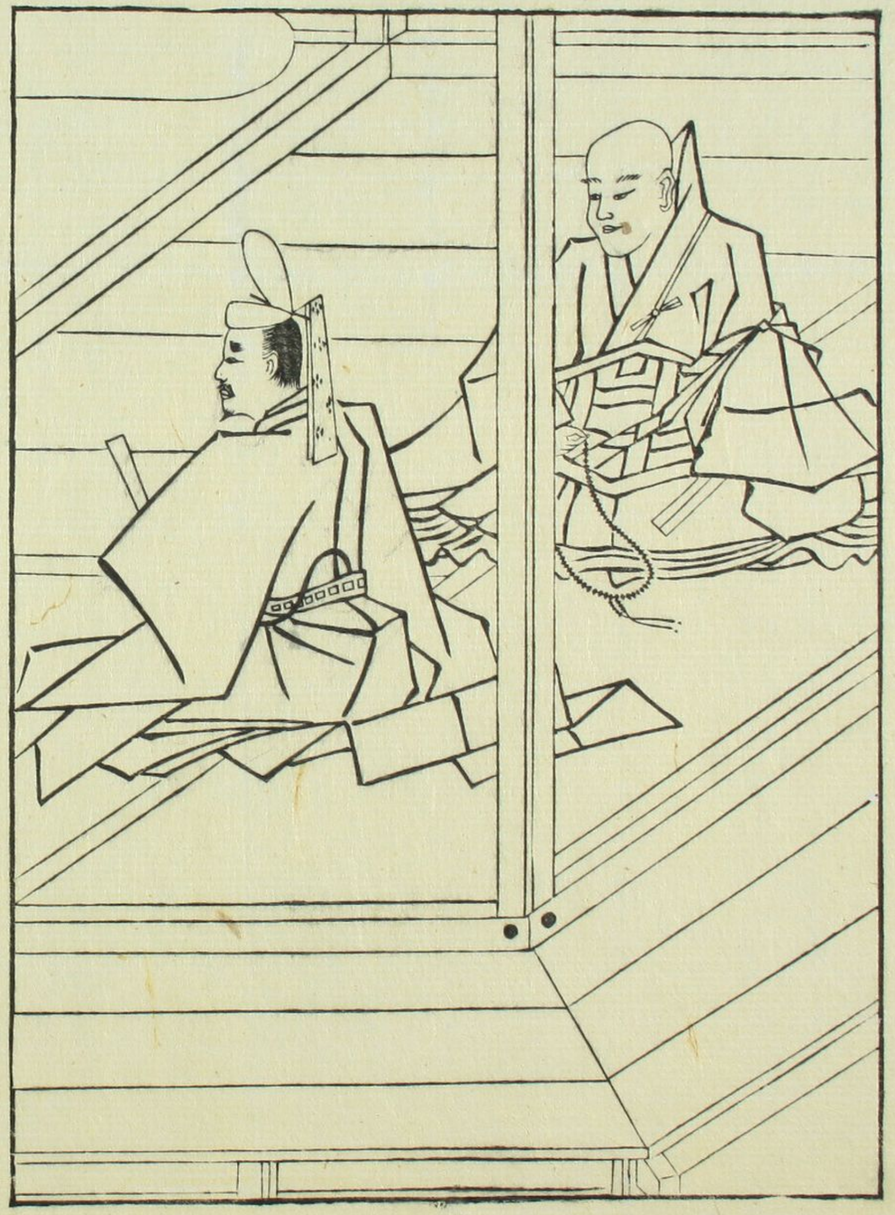
ぜを申されて。念佛ばかりをすすめ教導あり
なりしかばたひをなされなりなるハいま
一度上人の見参に入るきゆへよろこ侍りなる
ことゝかきりなく収束ハ迷なりハ受戒ハ布施と
たほくて。双紙箱を取出て上人の前に
ぢをきて申されなるハ。御要たるへき物
よハ侍ることを。御目ちかき所よをゝ弐て。
うけハ重衡この餘波ことを御覧し。且ハ思食出
ぜんたびよいとをわき御廻向あるへきよし
申ちかく上人その志を感しくゝけなりく
出家をなり



東大寺造営のために大勧進の聖の沙汰
仕るに。上人其撰にあるべき旨を申されき。右
大辨行隆朝臣を御使として。大勧進職たる
べきよし。法皇後白河の御氣色ありけれ
上人申されけるは。山門の衆徒の訴へ林泉の
幽栖を志め侍るべきよし。ひたすら佛道を修し偏に
念佛を行ずんためにこそ勧進の職に居
せば。剰務萬端にして素意をくるはすべきを
辱きよし仰かるるに辞申されけれども。行隆朝臣其
志の堅固なる仰見て。さらの由仰奏しけれ。
重ねて門徒の中に器量の仁あらば。奉申辱き
より。重て仰下されけるに。醍醐の僧房
重源を奉申さる。遂に大勧進の職に補
せられけるに。僧房伊勢大神宮に参て。此願
を成就をべくいそぎの瑞相を示し給へと祈請
しけるに。三七日の暁うちまどろめる夢に。

唐將衣束したる貴女方すれ玉後授弥ぬと思て。
ちめて見れん彼玉うけりよ袖れとよあり。重源
ちまを得て大よ収ひ珍秘と。其後天下響乃
ごとに應じて財寶心よはうせられん。祇園
金銅の本尊。うつのごとくこぎあつ〜ハしまりに
なり。重衡卿れ上人よ進する所の鏡を結縁れめ
ら。て送ちうりられん。佛を鑄ちてまつる爐れ
なりに入りに飛出てたるよりきあいさりなる。

不思議れ事ら。て申あひなる。大佛殿れ正面乃
柱よ折りて作ハ。彼鏡よてなん作りなる

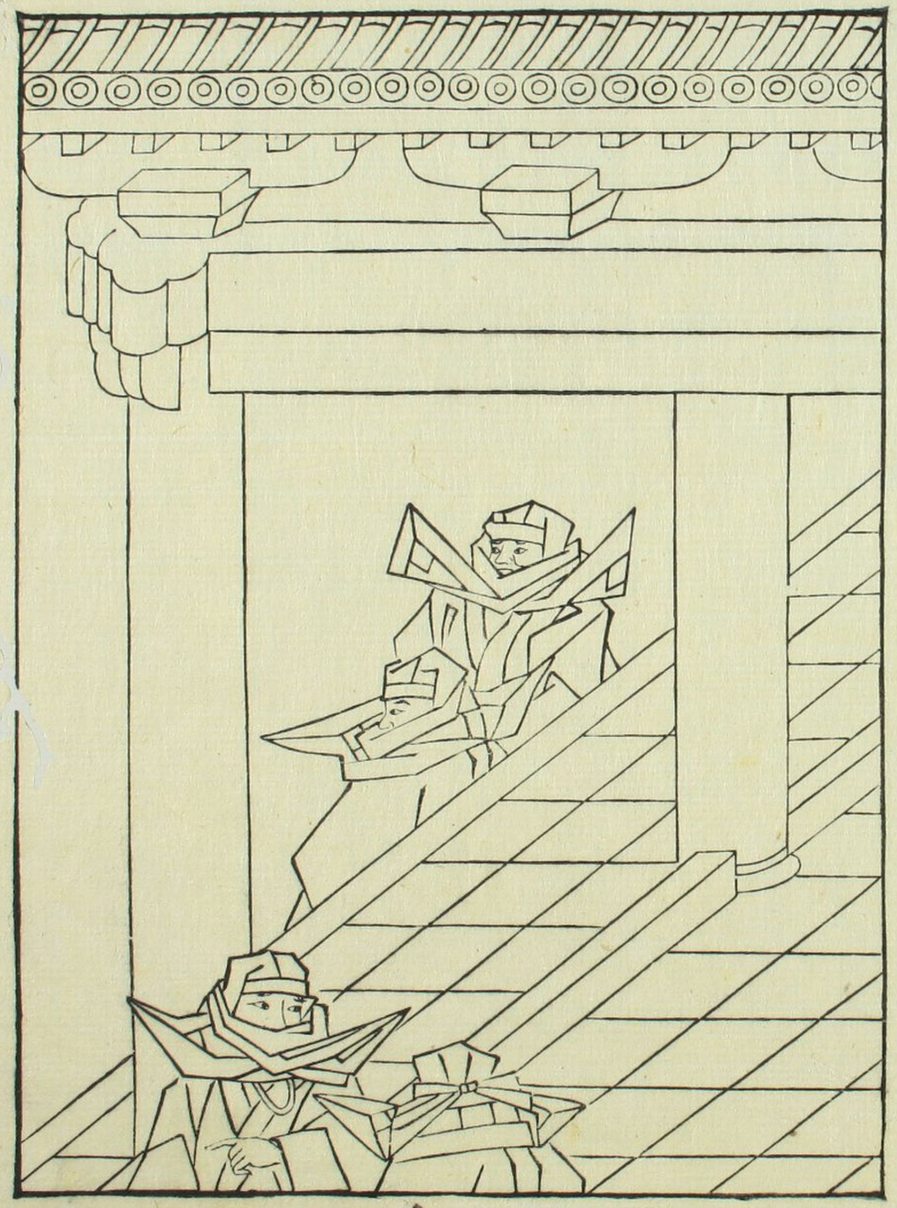


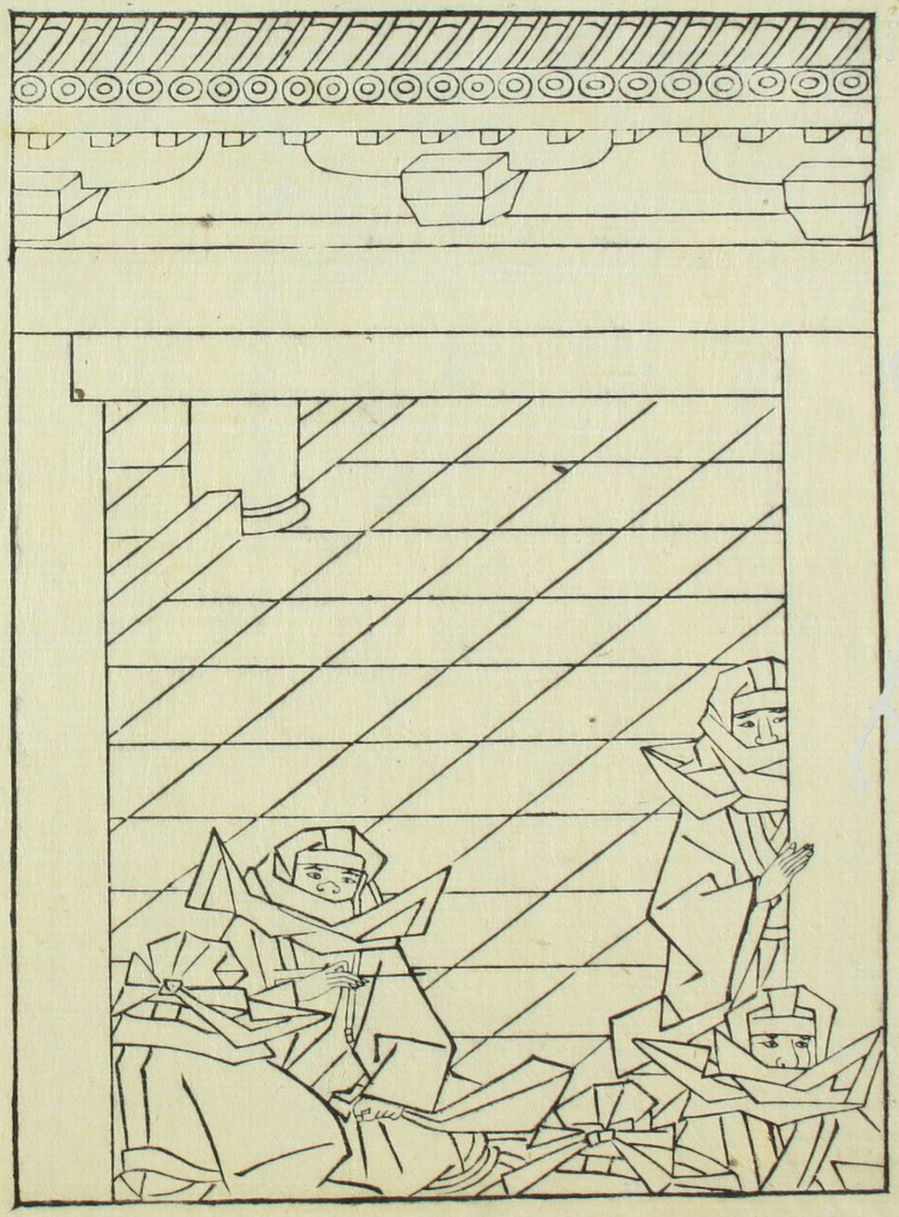
壽永元暦のころ源平の乱によりて命終都
鄙ようしなふをの其數をしらず。こゝに後素坊。
無縁の慈悲をたまふの後世のくるしみ
救ふ為に興福寺東大寺より始て道俗
貴賤ををくめて七日の大念佛を修したる。
その比まそ人いまる念佛のいとき事を
ふらしてすゝめたるわ事
きゝ。後素房この事を歎て人の信を勸めん
ために建久二年の比上人を請じ奉てとつり
大佛殿のいまる半作なる間軒の下にて。入
唐の時渡し奉れる觀經の曼陀羅。なをひら
浄土五祖の影を供養し。又浄土の三部經を
講ぜしめ給へるに南都三論法相の碩学
たちあつまりきる中に大衆二百餘人をの
くゝに腰巻を着して高座のきハに
なを居て自宗の義を問ひけゝ。訛謬あるハ。

恥辱なるべんこと。度したがたなる。上人
まづ三論法相は深義なるゆへ浄土一宗の秘
蹟をこまやかに釋しなく。末代の凡夫出離の
要法は口稱念佛ばかりなり。念佛を
そしらんことをかなしむ。無間地獄に墮て八萬
大劫苦を受べきなり。觀佛經の説によりて
説給へれ。二百餘人の大衆ともに涙を
随喜渇仰きはまりなし。東大寺乃一和尚

觀明房は已講理真ぞ。に涙をもよおしてハ
旬のよりひきてたえて物事偏に此事を
きんためがわらを脱申なるぞ。ちてそのはなる
てよ。天台圓頓の十戒を解説しなるよ。吾山ハ
大乗戒。これ寺ハ小乗戒このゆへなれば大衆存
外の氣色なりしかわるもれども。當寺は古老乃
中に。無日は霊夢を感ずるあわなる後さ
きたらて披露しなるにより。斟酌しなる

ようや。衆徒をのく口伐閑て。別事たるなら





上人座ヨリ出テ諸事ヲ孤ハバカラレタルモ
我國ノ風俗ニ隨フベク法門ヨリ世ノ人ニ
ハタラキヲノヘラレタルヨリ或ハ門弟ノ中ヨリ
ヲ出ル者ヲ出ル或申ス人或ハ手ヅカラ書付
ヲ與ヘ當ル沒後ニ披露シ給フ

春

ちへ〳〵ぬ花をあるゝ枝をなへて
面〳〵のかたるにのさうぶこそ

夏

わきはきくにけるかりいけうあしひろき
こゝろのはたにのはけぬ日そなき

妹

阿弥陀佛よろむるかのもとよいこゝ
秋の宿のもとくひたなるまし

冬

雪のうちに佛の四名を唱まこと

たゝ一ねるはかりそやそきこえめる
命佛法捨身命と云へる事歟
うちそゝのもとのゆゝしの悪りたる
あしよい分をを行ゝやはを歟
勝尾寺よて

柴の戸りあけくまゝ歟白雲歟　此歌入玉葉集
いけむさきのもとりこれさゝ
極樂往生の行業よは餘の行をさをて

たゞ本願に念佛をたゞむへしと云こゝ歟

あゝ佛といぬるゝ外はの國に

なるゝこゝをあゝうゝめへし

極樂へはゝ先てゝやくいてゝ

身のをゝわゝいまいりきなん

行法佛とゝいゝ西ゝ世ゝ乃

ゝゝめけゝてたる洋そすゝき

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨に心を

月新のいゝゝぬ里ハなゝけきゝゝを

なゝゝむるゝへのゝゝゝゝにゝゝゝゝ

此歌入續千載集

三心に中の至誠心乃ゝ歟

往生いゝゝにやゝゝゝゝれゝへゝん

ゝゝゝのゝゝゝゝれゝてゝゝゝゝ

睡眠に時十念を唱へしと云事歟

阿弥陀佛と十聲唱へゝゝゝゝゝゝん

なゝゝゝ弥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

上人てづから書付給へりける
手をゝなる小松殿をら給ふをよて
無量壽仏のむかへをそまつり
たゝせ給へれたまふいひきんこまつをく
をををををなるたるまつり乃枝
池の水人殿なんよ給ふ事里
ゝをゝすむとをゝる給ふ殿
むまれていまつり思ひいてんるををに

ゝ殿殿ふまををゝ殿
阿弥陀佛と申ふをゝをををををををよて
浄土の荘厳(しょうごん)なるをそう殿まつ
元久二年十二月八日　源空